土屋正義編輯

繪本石山軍記

六

遠山
2269
6

へ遠14
2269
6

繪本石山軍記初篇卷之六

目録

将軍家假御所うて御能興行
并木下智畧石山ふ用金を借る
三好の一黨蜂起して将軍家を襲ふ
并竹中重治台命を蒙る
摂河御所方後詰ふ馳登る
并三好敗軍して京都を落去る

信長一騎駐本國を進發
并柳營御所新ふ造營

繪本石山軍記初篇卷之六

土屋正義　編輯

將軍家假御所ゝて御能興行並木下智略石山ゑ用金を借る

維時今上皇帝八百七代正親町院の御在位ゝて去る永禄元年戊午歳御位ふ即せゐふ然とゝ雖ども應仁文明の頃ゝ四海一統干戈を動ゝ諸国の群雄蜂起ゝて乱ぎとゝふ隅もゐ斯る戦国の世となり程ふ帝の叡慮も任せらぎび内裏の築墻も破ぎ紫宸清涼の御殿も傾ぎ倒ゝくゞろゐぎども造営の用途調ワぜゐらひバ屋上ゝい瓦松壁ゝ蔦時を得ゐふ生茂り彼神詠の夜や寒ぎ衣やうゝぎ庁そぎの行合ぬ間ゝろ霜やとゝ。其古も斯ゐんと思出らゝくゞろゐぎバ損関かゝび左右

の大臣公卿殿上人の居所あんどん想像べし。風雨をさへ凌ぎよあふ形勢傷ましも勿体なしとも言んさなし。木下藤吉郎秀吉この体を見て三好松永以下の諸侍面々栄耀ゆゑ金銀を費せども十善の君の御座卿相の舘舎かく迫荒廃よおろべしを余所ふ見るせし薄情さよ何とぞ内裏を再興なし奉り公卿の家居をそまつよ修理しあらで莫大の忠功あるべしと織田殿を勧め奉りゆゑふ実もとは思ふまじくも容易なるべ大義なきば明年ふ至り沙汰をなるべ々まば其義はまづ差置き当時公卿の困窮を聊なりも助け進らせべしとて信長叙爵の悦び帰国の暇乞のため公々殿上人と本国寺の仮の御所ふ招請あるべく位階よ従ひ坐次を立

らま将軍家なも出座きしくゆゑる信長山海の珍味を集めて饗応あひ引出物品く料足を以て引きゆる座上の公卿初て信長の深き心とおめられしゆ支なりと心づき其悦び限りなし。酒宴終りて退出しあひ何まもく信長ハ世ふ頼りしき大将と感賞せぬハふなりゆる将軍家なも十月廿四日入洛并ふ将軍宣下の御悦しして勧世大夫とめしあひ能奥行なしあひ此度粉骨の輩ふ見せしめあよ此日将軍家なり信長ふ副将軍なるべき由仰出さましなども信長固く辞退あるべく御請申上らまぞ御能終りて後諸国の軍勢御暇を賜りて帰国せしめ其翌日信長も帰国の用意あるべく御暇乞ふ出仕あるべ将軍家名残を惜ませあひ今度切取まし

国く何まゝくも知行あるべき旨仰出さるゝ。信長さゝふ御請なるゝふ尚強て上意ゆゝるふ泉州堺の津江州大津草津ふ代官をさゝ置申べく旨言上あるる。将軍家もせめて寸志の御芳謝るゝく御感状を賜りゝ並ふ御紋の桐二引輌の御旗と賜ふ斯て信長飯国あるべくい京都守護のゝめ且い将軍家補佐のゝゑ然るべき武士を一個残し置候ゆゝ将軍もも禁裏ゝも御沙汰あるるゝ。信長畏り頭て京都守護人召具叅内仕り候と披露ありしゝ此後度ゝ申談ずる事あんゝ面會ゆゝて然るべし迚久我大納言入道の郷出會ゆいふ則ち木下藤吉郎ゝく其男ぶゝいゝも醜して長低く猿の如き顔色なり然

ども信長ゝまゝと挙用らるゝく所ゆまゝ是非なゝと覚束ゆゝも濟せゆゝめ将軍家ゝらるゝて木下が事い図及ぐせらまゝるども未ざ正しく對面あるゝ夏ハなるゝるふゝ禁裏へ御目見へせゝ支図せゆゝい斯る時節ゝゝ對面なゝ置ざまゝば便宜ゆゝぞとて其夜直ちふ召出さまゝ将軍家ゆゝも去ゝぐと對面なゝゆゝる。信長々万端木下ふ申含らまゝ且本願寺の執計ゆゝど審ふ談ゝゆゝて十月廿八日京都を立て濃州岐阜ふ帰城ゝゆふ去る九月出陣あり。ゝゝ都合僅ふ五十日余なり。偖亦石山本願寺ふハ信長が怒り甚しく今ゝや軍兵襲来らんと上人ぞゝめ上下の役人心も更ふ心ならぞ密ふ在所の門徒を集め弓ふ弦とゝゆ矢根を磨さ或ハ鉄炮

の筒とさゝ〳〵搨とさゞ竹策を結び合戦の用意とゝぐなり然
るに信長諸方の仕置京都の守護ホと定め本国美濃へ飯陣あり
うべ石山の軍用いとゞ〳〵ふなりて夢のさめゝる心地しつ是ホ附ても
鈴木が明智先言の違いざるを感賞し弥敬ひ尊ミゝる時ホ十二月上
旬本願寺の大玄関ホ来りく案内せる武士あり其面猿の如く眼
煙さゝく身のさけい五尺ホ満ぢ貌醜ゝれども威風又尋常あらぢ於余
人の供廻りを門外ホ待せ執次を以て申ゝるい京都の守護代木下藤
吉郎秀吉主人信長代参ゝて今日住吉へ社参いゝ其序を以て
推参仕る上人拝謁を免しめゞ本望ゝるべしと慇懃ホ相演ゝり取
次の者心驚き偖い肉及ゝる猿冠者とゝ此男なるゝ何支とゝ申来り。

いゝある騒動と引出そゆんと眉を皺めく上人へ如此〳〵の由言上しゝれば
頓て大廣間へ請じ入上人立出て対面あるべ秀吉参しく礼と行ひ
誠ホ先ゝい信長当御本寺を所望ホ及び候処御辞退の趣御宗
旨ホ於て尤の御儀信長逐一ゝ兼知いゝて候然るべ此以後信長
が心底ホおいく少しも隔意を挾む支なし上人も又御同意候ぞ
信長が本望ゝるべき条愚臣を以て見参ホ入候と謹て演舌せゝり上
人大ホ歓びめひ是い改りゝる御使と得て候ゝのゝる信長殿別心おと
せざるゝ法師の身とゝて争ゝ宿意の候べき唯大将の厳意を犯
し怒りゝ觸ん支のゝと恐入て候ひしホ今の御使と得て此上の安堵や
候べさゝく御喜の余り土器ゝて秀吉ホ酒を勧め山海の珍味

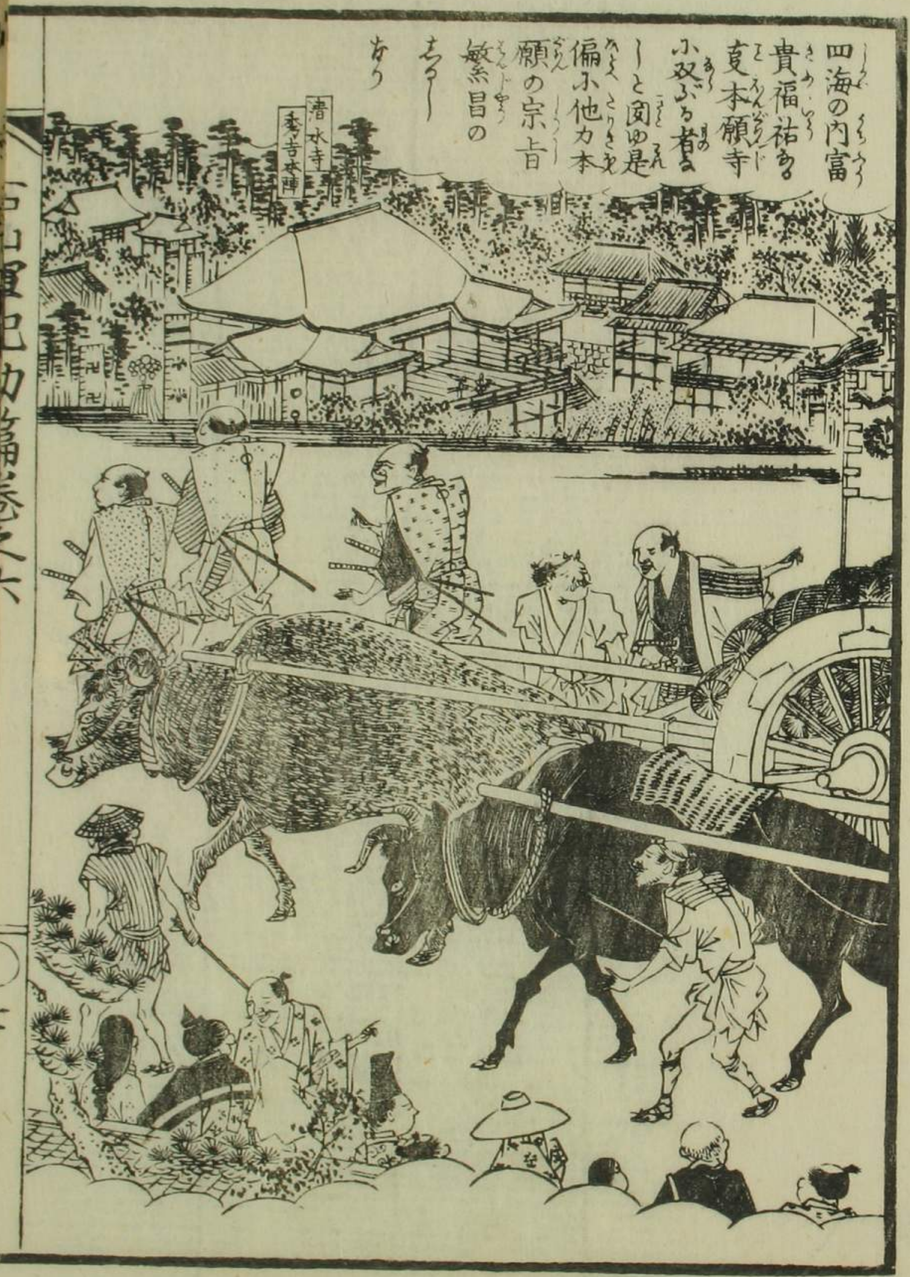
肴核席ふ満て稍酒宴と催しめふ何とぐる馳走ふとて近習小性
とりぐふ声おゝ〳〵催馬樂と諷ふ者もりう猿舞の狂言と舞ひく。
是ハ御客へ差合なりと。御座ふ溜らぞ逸るも有て種〻興と重る。
短き日あ〻既ふ西ゑ傾けば秀吉乞て盃とおさめ再び上人ふ申るい
今度義昭公上洛まゝ〳〵新ふ将軍職と嗣めゝ御座所さへおりせ
ざるふ四方の怨敵いやぐ亡びぐゝべ軍兵と扶持し粮米王藥と貯
日事の軍用夥〻〳〵万事不如意ふあゝせめふ信長深く是と患ふ
ゝとゝぐも自国の合戦ふ軍用足らぞ殆此一夏ふ計策と失ぬ上人
足利家再興の儀と思召さと一臂の力と扶け用金と助成あゝべ。
将軍と初め奉らを信長ゞ喜び何事ゝ是ふ如ん秀吉今日の推奉

実ハ此儀と申さん爲なり。御兼知候ゞ有難ゝぐべゝと頭とさげて
言上を上人委細令兼あて本寺退去の義ゝを幾度も辞退い
申せ我力の及ぐん程ハ助力いゝをぐべゝとく。銅銭二万貫則秀吉と
取次とゝて献上あり。猶後ゝり追々上納ちぐべさ由閔へめへ秀吉感
涙と催し頓て銅銭と人夫數多ふ荷ぐを上人ゑ恩と謝し京
都へゝを上りゝる去程ふ顕如上人を信長ゞ怒り解しと歓びめへ。
尚も足利家再興の助けもとそ泉州堺の津ゝく福祐の門徒と
御頼あゝく若干の金銭米穀と上納しめひゝるまゝ家老下間頼
廉いゝめゝく申るハ信長ハ表裏定めぬ奴人なまゝ如何なる計畧
をる心中ふ企てあゝんも量りゞゝ用金上納の義も一應ハ然る

本願寺より将軍家へ
金銭米穀を上納の圖

應仁以來天下の擾乱
止まなく諸侯軍事
小勞を何とも困窮せ
ざるはなし其中小石山
本願寺は加賀能登
越中の三箇国と一
圓小領し其外諸
国の門徒より金
銀米銭を寄
附する程り

四海の内富
貴福祐ある
夏本願寺
小双ぶる者な
しと図ゆ是
偏ふ他カ本
願の宗旨
繁昌の
ちろ
なり



べく候へども斯數〻差上らき候てハ當寺の困窮ゝも相なり
且ハ門徒ホガ思ゝの程も覚束なし先紀州藤白ホ使を立られ
鈴木重幸ホ談ぜゝと渠ガ申條も御図あつく然るべしと言上
ゝきゝ上人宜ゝハ我ハ唯世の人の患ある事を救ふんと信長心
に不信を抱ゝ渠ガ身ホて報ゝべゝきゝ我身ホ何の恐まらあん然
とども汝ガ言も理り有とて使者を以て重幸を尋問ちゝきゝる重
幸使者の演舌を逐一ホ図終り手を拍て大ゝ笑ひ是ハ木下藤
吉郎ガ計畧ゝく彼猿冠者上人の佛種優長ある長袖を欺き將
軍家再興と唱ド本願寺の金銀を借て密ホ信長ガ軍用ホ宛
諸国の敵徒と退治一己ガ勢ひ強大なる時不意ホ起つく本願

寺と攻んゝて是兵書ホ所謂敵ホ道を借て敵を滅を謀なり足下帰
つく上人ゝ申べきハ此後用金調達御無用ゝべし且豫め兵粮軍
器の御用意ゝつく信長ガ不意ホ責ゝけ候と御覽候へと申きゝべ
しと答へしゝ使者の役人大ホ驚き急ぎ石山ゝ立帰り如此ゝの
由申上きゝ上人半ハ信ド半ハ疑ひめども先重幸ガ言ホ随ひ是
きゝて用金上納の支ハ止まりぬるゝ

三好の一黨蜂起て將軍家を襲ふ并竹中重治台命を蒙る
帝都守護且將軍補佐の爲ゝて木下藤吉郎秀吉を殘ゝ信長
帰国あつく後ハ秀吉三千餘の軍兵を率ひく東山清水寺ゝ陣
を取洛中洛外の政道を掌りきゝ禁裏將軍家ともホ木下ガ人

品軽々しく見ゆるを悔り公攴の裁断いぐわんと覚束なく思ふまゝ
しが木下が法度厳重ふして賞罰明らゝ聊も依怙の沙汰なく
撰を以て威をろ仁を以て愛をろめ廉直清潔ふして公儀を敬ひ
百姓町人を憐ろる程ふ始めとん大ふ相違し木下を重くろて
ろやしろる木下三千余人を五百人ゞ四組ふ分ち二組い禁裏を守
護し二組い将軍の御所を警衛し残り千人い清水ふ於て調練を
其外ふ洛中洛外ふ昼夜廻りを申付非常を戒し程ふ夜盗乱妨の
患ひなく法令厳重ふ行ろろ市中諍論なく家業を専一ふ営ろ
ろふろ上天子ろ下万民ふ至るまゞ始めて安堵の思をろ
ろ再説三好の三人衆と称をし三好日向守義興同下野守政康

岩成主税助慶之ふ去める日摂州河州の城々を明退き剰へ四国迫逃
下ろし事残念の至りなり此恥辱を雪ゞやと三人衆暗ふ摂州
へろろて京都の容子を窺あいをる信長い本国ふくを諸国の
軍兵い暇をあろう将軍義昭卿ろい六條本国寺ふ入御ましく守
護の兵士僅なりと告しゞ岩成主税助大ふ悦び是天の与ある所し
不要害の寺院ふおるをと不意ふ押らせ将軍を味方へ取こあ奉
り京都に入替り摂河両国を取返し信長と雌雄を争べしと先
味方を集むるふ當国ふ隠を居ろし矢野和泉守同伯耆守篠
原丟蕃元吉成神助加治撰之助塩田采女正青山喜十郎奈良左
近大夫ふ追く馳あつまり程なく一万余人ふ成ろう岩成大ふ歓び

堺の町人
三好の勢を
饗應圖
堺の津い富家多
くして未三好と
親しう程ふ
先づ〻織田家
の觸渡しも従
りて返て堺の南
北ふ城門を構へ

防戦の用意をも
なるう速ふ誅罰
わるべんども大事の
前の小事ありとく
老臣等の諫めいう
信長いうを押へあふ
外なう故ふ今度も
三好ふ従い軍勢を
饗應し酒飯を
調へ馳走し
ゑとゑう

此上ハ四国の勢を呼登せよ及ぶ片時も早く討立べしとて此程美濃の齋藤龍興長井隼人ホ三好ホ扶持せられて居られしを先陣なり。先手始めホ和泉国家原大鳥郡の城ヱ押よせ攻立る當城を三好左京大夫義継ガ持城なれば寺町左近笹部作兵衛なを守りられしガホ勢ふく防戦なりぞ両人共ホ自害して死しられる三人衆大ホ悦び物なれば吉と勇を立直ホ堺の津へ押寄られ是い十二月九八日の夏ふて何ども歳暮の事多き時なれども堺の南北の庄官初められ三好一家ホ従ひ者共なれば諸軍勢を請ひ種々ヨ饗應し寒氣を助られホ村醪を飲ひ馳走なられば此地ホおいて勢揃とな。翌る永禄十二年正月二日堺の津を進発を岩成を頼りホ京都へ押寄ん事を急げども三好長縁同政康両人ども嫉妬偏執の生質ふく意地をられ三人衆共ホ心和ぞ其日ハ河内国ヨ乱入ひ。義継ガ領分を放火ひ出口中堀ホ陣を取翌る三日ハ山城国美豆野ホ討出四日の未明東福寺ホ陣を移ひ本国寺の体を窺ひられる将軍家ハ御家督後始めての正月といい御祝儀の事繁き處ホ二日の早朝ハ三好一黨蜂起して攻上られ風説區々ふく何となく騒動せしば将軍家ハも驚きあ折られ早馬本国寺へ馳着て三好の一類大軍を催ひ和泉河内を乱妨ひ京都へ攻上り候御用心あるべしと注進せしば本国寺ホ有る諸軍勢是ぞふくい防ぐべき手當なしと上を下へと混雑ひ如何い

せんと防戦の評定數あるゝが折ゝ木下藤吉郎ゟ元旦の御礼申上て後江州ゟ沙汰をゞさ公事出來せ〜迚其日の未の尅ゟ彼所ゟ下向〜未ゞ飯り桑らゞ然まどゝも孫く守護の兵士ハ定のごく有るまゝバ先是ホを以て防戦の用意とゝのゝへ〜とて四日の早朝ゟ手分をな〜本国寺の總門寺町并ゟ四方の辻〜と固させらる其人々ゟハ惣門へ細川右馬頭藤賢三淵大和守藤秀両人と大将ゟて五百余人ゟく固めゟ樓門ゟハ織田左近将監同左馬允槙嶋六郎を大将ゟて是も五百余人ゟく固めゟ将軍御座の間ハ曽我兵庫助飯河山城守二階堂駿河守ホと始め五百餘人ゟく守護〜奉り野村越中守い武勇ゟぐまし〜者ゟまバ足軽大将ゟて

五百餘人ゟく四辻〜打出固めゟ惣勢二千余人其外木下ゟ兵士ホハ両門ゟ加ゟて扣へゟ此支追く江州ゟ在る木下ゟ許へ早馬を以て告知せるゟ四日の申の刻木下ゟ飛脚本国寺へ馳着細川右馬頭ゟ書輪を以て申送りるゟ逆徒蜂起〜御所を襲のはし義知仕る然ゞ〜御心頭ゟ及び候まゞ。秀吉ゟ今夕方爰許の埒明朝ハ皈京仕るべく候其間某平日申付置ゟ兵士どもゟ守護仰付らるべく候其外清水寺ゟ殘〜置ゝ兵ホとも召寄らゞ御手當あるべく候左彼ホ方へも申遣〜ハバ某留守ゟくも相違あるまゞく候ゝゞ書ゟるる右馬頭此状の旨と以て披露なゝ〜ゟば将軍家ゟも頼ゟく思召ゞ秀吉ゟ申上〜

る任せ清水寺の陣へ使を遣さるる。當陣ろい留守代ろて竹
中半兵衛重治淺野弥兵衛長政三百余騎ふく守り居る所へ秀
吉ろの書簡到來し。凶徒防禦の支竹中半兵衛ろ〜是と計
べき旨を申來るる依て其用意をあそ処へ將軍家ろ上使來つて召
まし〜ぶ淺野弥兵衛竹中ふ對ひ當所ふ残り留る兵士三百余騎凶
徒の勢ふ合せくい十分ぶ一つも足らぞ是と防ぐべき良策ありや
いろふと向重治答て別ふ思ひ設け事もなく余まども然而已怯
ぶき夏ろも非ぞ軍い順と逆ろ機変ふ應じていろ程も手段あるべ
何ふまま參上して後夫くの工夫を爲さべ〜足下い當陣を堅く守
るべ御所へい某一人罷向ふべ〜と申ふろろ淺野も左と同心し。三百

余騎い其まくふ清水ふ殘し置ろろる従者四五人を召連上使と倶
ふ本国寺ふ至りる。本国寺ろい將軍昵近の面く防戦の用意をる
し木下ろの言上る任せ清水寺へ使と馳らまるふ竹中半兵衛
重治唯一人參上せしぶ將軍家不審おぶし召細川藤賢と以て
其故を御尋有るる重治謹で御返答申上るい三好一黨蜂
起仕り以の外大軍の由ろい候へども又恐るべき程の敵ろて候へ
其故い御所の御備への薄きを窺ひ襲奉る程の敵どもぶ何迚今
迄寄ざる哉無益泉州河州を乱妨いて候支ども全く近辺の野
武士盗賊ゐどぶ三好の名とろて働くなん若又実の三好ふ渉ぞ
當月二日ふ堺表を進発せし者の河内へ乱ま入候い全く三人衆ふ

秀吉
郷民等ふ命ゝて
奇略を施ゝ圖
秀吉江州ゝ
有て才国寺の
大寳と図即時
ふ大津山科宇
治田原の郷民を
召ゝ例の紙旗
紙幟を製ゝ
秀吉

濃州岐阜ゝ織田の
大軍後詰ふのゝふ
形勢をなて三好が
軍勢を破りて奇
計と将軍家も御感
あゝく実信長の目
代ゝく都ふ止も
呼理ゝと數
称美ゝ

ゞ心一致せざる故ゝく候ゝべ〜。注進の趣を以て考へ候ふ。泉州家原
と責落〜候い旧冬廿八日の由ゝ候可様の小利を貪る心ゝ。何
迚大事とゝ〜得候べき。心も揃ひあ者ども何萬人徒黨ゝ共
蟻の集りゝも同ど事ゝく更ゝ驚ゝせあゝ儀ゝい候ゝべ然〜か
ゞ一且い嘸強ゝべく存候ゝまゞも大勢と申ゞゝゝて其心一致
せざまゞば砕くふ安く候べ〜。聊も御心頭ふ懸させあふ支ゝいい
ゝゞと言上せ〜にゝ。将軍家を始め奉り諸将ゝゝ尤と同意。
流石木下が留守代ゝ。能も軍機を察〜勝敗を覺ゝ〜者ゝふと
称美き〜く。此度の万事指揮ゝ〜候へと竹中ふ打任せあゝる
半兵衛重治台命の懇ゝるを深く悦び先ゝてゝの定めの通り

五百人ゞ二組を以て禁裏の御門を固め。如何ゆゝの支候ゝも更ふ御
驚き有べゝゝゞと傳奏衆まゞく申上ゝゝ。偖本国寺の御手配り
既ふ定めゝせあゝ〜趣ゝく尤然ゝ〜。野村越中守ゞ手ふ木下ゞ
従卒一千余人と差加へ辻ふゝく守ゝく猥りふ打出べゝゝゞ此方ゝゝ
ゝく塩合を見て相備をゝゝべ〜と下知〜ゝ敵の寄ゝと待ゝゝ
ゝ程ゝく其夜も明ゝゝ。五日の早天ふ三好勢一萬余騎大宮
と上りゝ駈通り両と作り太鼓と打て攻寄ゝ竹中半兵衛野村
ふ謀計を授け寄手の鋭氣と避て後千変万化ふ指揮〜ゝ
防戦透間ゝゝ〜ゝども敵い大勢追々ふ入替ゝども味方い小勢ふ
ゝふ其上労ゝて後詰ゝゝゝゝば此所の合戦始終味方の勝利覚束

なり。一先引揚て別ふ計策を回らすべしと。重治ぞ下知ふ随ひ野村も実もと旗本ふ段くふ引上ふ。三好勢ハ是を見て付入ぞやとハ思へども散乱なりふ先手ふ支へらるを急ふ付入ぎ猶豫の内ふ御所方ハ難なく引取て速くも木戸を差固めしうぶ詮方なくて敵兵を惣門前ふ詰寄ふ竹中重治をみ出味方戦ひ労れて候へハ暫く休息せしめん為敵を退け申べし其ぞ謀畧ハ斯と野村ふ示し合せらるる野村其趣を将軍家へ言上ぞ義昭卿如く感じ給ひ寺僧を召て仰含らるふ本国寺日勝上人兼ねと申も果ぞ直ちる寄手の陣ふ行向ひ三好日向守同下野守ふ対面し演舌をふくゆう當寺ハ三好家擅越しぞ尊敬あり

ける寺家なるを今更申ふ及ひ難ぞ然ふ急ふ合戦あし給ひ将軍家さぞめく勝利あきを察ふして放火し。其内ふ御自害もやはん若ふ有ときハ擅越新造の本寺忽ち灰燼ふ成ぬべし本寺の為思召ひぐ御陣を少しく御退あらるべ。其後拙僧将軍家を勧め奉ぞ他所へ御移あるゆう計ひ申べしと實しやうふ言さるれば三人衆も左と同じ心中ふ将軍家御出を窺ひ途中ふて謀り申べしと思るふより上人の頼ぞを兼引し何さふ斯る大伽藍一度兵火ふ罹りあぶ再興容易ふらもまじ。僧徒の歎くも所理なり早く将軍を御出申さるべしと約定し各攻口を引退き七條道場まぐ退陣し将軍令や御出寺なると窺ひる御所方一旦の計策ふよりく凶徒陣を引退

くとも程なく亦来るべし其時は如何せんと安き心も無りけるを
ども竹中重治は軍幸み馴る豪傑なれば是等を少しも屈せず尚も
軍慮を廻らす

攝河の御所方後詰み馳登る并三好敗北して京都を落去る

時に河内國若江の城主三好左京大夫義継は昨四日に若江を打立八幡
に其夜は宿陣し今五日の曉まで黎明に義継向の明神の前に陣をと
り人馬の息を休める処へ池田の城主池田筑後守同豊後守同丹波守伊
丹の城主伊丹大和守の一類尼ケ崎の荒木信濃守等馳着て追々早
馬あて出張のよしを本国寺へ注進を和田伊賀守は摂州芥川の城に
在住せしが此大変を聞とひとしく本国寺へ馳せ登らんと四日の

夕方芥川を発て山城国西ケ岡に陣を取り暫く息を継ぎ居る京都
三好が一党い本国寺より将軍いまや御出あると窺ひしらども其客
子も見へざる処に後詰の軍勢もぞよ八幡山崎を経て寄来る由
注進しるるよりも岩成主税助らを岡何らの摂州の御家人一味
して馳上らば後と断切るべき難義なり未だ大勢集らぬ前に追散
さばしと一萬余騎を二手に分け岩成主税助三好山城守両人は桂
川へ進発し後詰の勢を討破らんとも又三好日向守同下野守は将
軍の出寺待遠るまい本国寺焼失せば亦りや造り改むべし猶豫
とあらば攻寄んと吉成松山が輩と倶に五千余人を引率し七條
道場を討立る和田伊賀守惟政は西岡を立て本国寺へ参る路次

うく此三好が勢ふ端なく行合うう。和田い僅ふ三百余騎なれども。三好が五千餘騎よ駈合く些も擬議せず號き叫んで討て入面もふくど戦ふうう三好い是を中ふつんで一個も余さず討取やと。三百余騎を追取圍め遁ちまじとぞ責うる和田い名ふふ勇士なう鋒うう火花を散し一足も引じと戦ふうう余まども敵い五千余騎突ども切ども入替く目ふ余りうる大勢よ勢ひ後まを氣労まを八十余騎い討死し残兵過半疵を蒙り伊賀守も薄手三ヶ處負まども物の數ともせずうる三好方も討死多く少しひくて見へなく大勢なまい和田惟政ちくよ討死なそべく如ふ三好勢おりもよらど後崩まよ乱まつ散くふ成しうば伊賀守い奇異まも九死とのが

まを一生を得うう抑是い誰人の後詰ぞと不審つ見くさせば。五色の吹貫真先よ立其勢一千五百余騎蜂須賀父子よ堀尾稲田梶田が輩を先くて木下藤吉郎が手の兵士なう既よ秀吉江州うう帰京の如よ凶徒襲ひ来うう注進を因まど此等を向くふ和田を援け尚大津山科宇治田原の郷民を語らい紙旗紙印をあ立美濃尾張の大勢只今後詰くて寄來う体をあくまい三好が軍勢大よ狼狽あの大軍よ取囲まるあば如何よせまじと臆病神よ誘くまを加くい後崩ぞうくうる又桂川うく三好と御所方の後詰。摂河の勢と合戦あると因くくが木下下知くて件の郷民どもよ計畧を授け桂川うぞ向りせる本国寺うい竹中半兵衛志ぐくく鋭氣

と養ふ折ふ。遥に遠く五色の吹貫の春風にあぐくを見つけ。偖ハ江州より秀吉飯京あり〳〵ぞや今い打出カと合せ候へと下知をなして真先に進めば跡に續き〳〵一千余人土烟を立て駈出し秀吉の手に加り〳〵敵を追討支毛を燒が如くなり三好義継池田伊丹と一手に成て岩成主税助三好山城守と桂川の彼方〳〵追つ返ち戰ひしが岩成が手に揉立られ色めき立く見へ〳〵しに木下が奇計の郷民三好岩成が兵士の横合より鬨声と發貝鐘と鳴し。大軍の勢ひとなりなるより味方の兵士の北るとも敵の寄るとも散〳〵に敗北し一先京に引返し日向守下野守と一緒ろあんと議しなる所へ日向守も下野守も言甲斐もなく討れ。

岩成が手に落來ふ主税助も山城守も是い如何ともあるべき果て。斯ていぬ此ふ猶豫なりんと泉州へ引久し我先へと落去て始めい一万余人と聞しも漸く宗徒の兵士ハ千余人も足ざるなり本国寺の手より引退く道〳〵討死せしい吉成神助林源太郎奈良左近岩成彌助を始めとして八百余人とぞ聞へし木下頃て本国寺へ參上し。將軍の御所へ伺候し。山徒遠く落行て京都ハ御敵一人も足を止め候ひ御心易思し召るべき由言上ハ及ひ〳〵義昭卿數御感あり〳〵始め〳〵秀吉が智謀の程を知しめしなる。三好義継池田勝政伊丹親興和田惟政ハ追く本国寺ハ參上しなる。將軍皆〳〵を近く召され軍功を賞美しめひ暫く爰ハ止り守護あるべき

由と仰出さるゝ

信長一騎駈本国を進發并柳営御所新ふ造営

信長朝臣い本国岐阜の城ふ越年あゝく今年い伊勢を討平げらるゝ〳〵て其評定あゝる折ゝ正月六日未刻京都の飛脚到来し三好一黨蜂起して本国寺を襲ひ合戦ゝゝ急ゝる由を注進しゝれば信長直ちふ御座を立せあひ凶徒蜂起のゝ片時も猶豫ゝゝて飛馬ふ鞭うち一騎駈ふ出あひ其夜の亥の刻ふ江州高宮ふ着あふ家中の諸士追くふ我後まじと駈付ゝ此時ゝや二千餘騎ふ成ゝる今夜い此ふ休らひあひ翌七日瀬田まぐ進ふ處へ京都ゝり再び飛脚到着し凶徒御所を襲とゝども諸士ゝく

防ぎ戦ひく是ふ打勝敵のゝゝて退散し静謐ふ治ゝゝ告奉ゝゝぐ信長大ふ喜びあひ人馬の労まと休めく静ゝふ上ゝぐ迎其日い瀬田ふ止宿あゝく八日の早朝本国寺へ參着し将軍の御所ふ出仕ありて合戦の御勝利を賀し奉ゝゝぐ義昭卿ゝい信長の早速ふ上洛あゝしを深く感じあひ合戦の一五一十諸士の働き木下が謀略落もなく仰出さるゝゝ信長も是と賞せらるゝ實やゝゝ要害ゝさ所ふおさまりて凶徒ふ襲ひ奉まゝゝて武衛の陣の焼跡ふ柳営の御所と造営あり則二月九七日鍬初ゝて夫ゝり夜と日ふ續で急ゝせあふ普請の奉行ふそ村井民部丞島田所之助ふ命ぜらるゝ成就の時まぐい信長ゝも滞留

信長堺の町人を罰ル

南無妙法蓮華経

あるべしとて。二条妙覺寺ふ止宿あるべく。萬事を差圖なしぬふ
雍州府志云武衛陣ハ下立賣の南室町ふ在古武衛此處ふ在とふ
一說ふ武衛ハ三管領の斯波ふして斯地ふ住をと云
同書云二條城跡曾て靈陽院義昭公本国寺ふ在せし時織田信長ハ
の亡を聽ひ三好の一族大ふ之を囲む信長公急ふ洛ふ入茲ふ於て三
好軍退き營中悉ふ。爾後信長公二條の城を築き相共ふ之ふ
移ろ今高倉二條の北を天守町と謂二條城斯處ふ有し乎介有ど
其城跡ニ說ふあるべく。何きを是とをべき哉知らぬ
偖亦信長泉州堺へ上使を立らるを庄宦宮老の者どもへ仰ふ去
年將軍家御上洛ましゆをふ堺の町人のゝ御祝賀をも申上を剃さへ

今度怨敵三好ふ從ひ其津ふ於て勢揃をいとさを饗應馳走ふ及
合戰の調議を拵へ將軍家を責さを申条町人の分際ふして三好同
意の逆徒へふ以て三好ふ荷擔いをふ於て堺の津の四面ふ
火をうけ老少男女を撰ぶ。一人も殘らず斬殺をべし早く京都へ
上り返答ふ及ぶべしと有ふまい堺の町人狼狽さわぎ上を下へと混
雜し信長いふをてふ。世ふ囚へふる强氣の大將ふ。如何ふる憂目を見
んも計りがたし迚老ふを扶け幼ふを抱き東西ふ逃散南北ふ信
傳紀州泉州の山奥ふ身を隱をを者夥しく実ふ稀代の騷動ふ
是ふよりて庄宦宮老評議をふ急ぎ京都ふ上り返答申上ふる
御諚恐入奉り候我々三好ふ心をふを執あつふ仕り候儀そい

毛頭ことなくいく共近き頃まぐく京都の執權職なり。三好家の衆中ゆく止事を得ぞ要用とも兼りてこそ候へ町人どもの儀ふ候へば何方へ一味仕ると申譯もことなく何分よ御赦免あり下さるべき堺の津を立置き下さるべき候ぐ廣大の御慈悲あるべく存奉ふべしと種々ふ侘ることば信長より仰出さるく趣い汝ホグ罪科死と道ろべき謂なりといへども將軍御上洛ふまるく大赦行るく時ゑまべ死罪一等を免ぐべし首代の過料として金子五十万両堺中ろう早く上納仕るべしとの御事ありと仰渡さまるる。庄官宿老共畏り其段いろいろも仕るべしとて下りる斯て堺ふりより此由を一統ふ觸渡し金子調達ふろろぐ流石ふ大金の夏ゑまべ町人ども色こと

難渋し數代持つくし名器名物と賣拂ひ屋敷田畠を金ふ換辛ふ調達し献上して堺の津無異ふ治まる。信長此五十萬両り去冬より本願寺數回の上納金を合せ禁裏御所及び諸公卿の殿舍一宇も殘らず修理あるべしとの仰ありく五畿内そこ近江美濃尾張丹波若狭ホの人夫を集め晝夜を分ずず造營急がるし程よ同年四月六日御普請全く成就して將軍新御所へ御移徙の規式嚴重の綺羅莊飾故實を正さまるる乱世ふい珍敷大儀とりるべし翌日御祝の御能興行あり。勲功の諸將をそれ隨逐艱難の諸士ふ見物らべき旨と仰出さまるる。万端滞なく濟せらまふろ。信長の下知にて諸国の武士帰国ありく然るべしと觸渡

さて信長うへ暫らく在京し。洛中の仕置彼是と沙汰ありて。頃て内裏御造営を相急ぐべき由命ぜらるゝ普請奉行を始めの両人ふ。妙顕寺日教上人を加へて即時ふ造営を始めさせゆ此時大和の筒井順慶井土十郎大夫国秋をして新御所御移徙を賀し献物を奉るとぞ。介有び内裏を初め諸公卿の殿舎まぐも修理ゆかるゝうバ主上叡感浅からぞ。諸卿相いづるも愁の眉をひらきなゝ。尤此一条ハ木下藤吉郎の智畧より出る所ゆて信長ゆきと用ゆふが故なりと図へる。信長うハ五月十一日京都を發足し濃州岐阜へ飯城あらるふ。今度ハ木下も俱ふ飯国あるべき由定めらるゝ。将軍家とゞめ内裏よりも今暫し京都静謐まぐ残置るべき由仰出さるゝ。是非ゆく木下と残さるゝ然ハ秀吉の面目身ふ余りくぞ見へらるる。信長此時秀吉を召具して飯国あるべき由定めらるゝ。当春より勢州を切平ぐん本意あるべきゆ。尤正月早く思立まてく其評議りつゝなりし。如ふ本国寺の合戦出来りく終ふ此頃まぐ在京しゆへ延引せしなり

繪李石山軍記初篇巻之六終

石山軍記初篇卷之六